

倫理の崩壊をもたらす文明のなかであって

学院長 嶋田 順好

66年にわたる私の人生の歩みのなかで最大の世界的出来事はなにかと自問自答すれば、日本がバブル崩壊を迎えた時、軌を一にするようにソ連が崩壊したことと言えるでしょう。それは社会主義の敗北であり、資本主義の勝利ということでした。言い換えれば平等の理想の敗北であり、自由の理想の勝利となりました。それが結果的には1990年代から2000年代の超大国アメリカ帝国の出現をもたらしたのです。

ソ連が崩壊して以来、私たちは好むと好まざるとにかかわらず、「売れなければならない」極め付きの資本主義の中で生きていかざるをえなくなりました。ミルトン・フリードマンに代表される新古典派経済学が力を持ち、それを政治的に現実化したのがロナルド・レーガン（1981年～1989年）、ジョージ・H・W・ブッシュ（父1989年～1993年）、ウィリアム・J・クリントン（1993年～2001年）、ジョージ・W・ブッシュ（子2001年～2009年）という米国大統領たちであり、経済政策的に裏付けたのが1987年～2006年まで5期にわたり第13代連邦準備制度理事会（FRB）議長を担ったアラン・グリーンスパンと言えるでしょう。もちろん日本もその大きな流れに乗ったのです。

新古典派の背景にある政治思想は、18世紀の自由放任型の自由主義と言ってよいでしょう。政府の権力を最小化し、政府による規制を緩和し、市場の調整能力に期待し、徹底的に経済的自由を求める考え方です。その淵源を辿れば経済学の父アダム・スミスに至ります。彼こそは「見えざる手（市場機構）に導かれて……社会の利益を増進しようと思ひこんでいる場合よりも、自分自身の利益を追求するほうが、はるかに有効に社会の利益を増進することがしばしばである」ことを主張した張本人だからです。

東京大学名誉教授の岩井克人氏が「私は経済学者です。そして、経済学者とは現代において数少ない『悪魔』の一員です。人類は太古の昔から利己心の悪について語ってきました。他者に対して責任ある行動をとること——それが人間にとって真の『倫理』であると教えてきたのです。だが、経済学という学問はまさにこの『倫理』を否定することから出発したのです」と明快に事柄の本質を突くエッセーを記しています。

現代文明の底流には人をして倫理的に生きることを不可能にさせる欲望追求の力学が働いていると言えるのではないのでしょうか。聖書的な言葉との関連で言えば、現代は「受けるより与える方が幸い」（使徒言行録20：35）ということが忘却され、「与えるより受ける方が幸い」ということにおいて野心的であれという時代になってしまったのです。その典型とも言える人物がトランプ大統領と言えるかもしれません。

マックス・ヴェーバーが次のような預言者的警告を100年以上も前に記しています。

「営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格をおびることさえ稀ではない。将来この鉄の檻の中に住むものは誰なのか、そして、その巨大な発展が終わるとき、まったく新しい預言者たちが現れるのか、あるいはかつての思想や理想の力強い復活が起きるのか、それとも——そのどちらでもなくて——一種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石と化することになるのか、まだ誰にもわからない。それはそれとして、こうした文化発展の最後に現れる『末人たち』《letzte Menschcn》にとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。

『精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは、人間性のかつて達したことの無い段階にまですでに登りつめた、とうぬぼれるだろう』と。」

宮城学院は倫理が崩壊しつつあるこの文明のただなかで「精神のない専門人、心情のない享楽人」ではなく「神を畏れ、隣人を愛する」人を育む学び舎であり続けたいと願います。